



半青居新甫選
蘆明庵五休投

蒼君札公羽俳諧附合集

東都書林 青雲堂梓



持之俳諧乃練磨の如ける人胡く得る
空河の雲の如くはまらるる花をくぬく
趣をうんとす勢そのふ雲おちたこのおのまの雲の
中より自在をゆてあつて正風成けりきまよく
時分りかきし中流をりてちりしるる名道とて
達人もよみし如く一湖の芭蕉書蒼君札の
よきその境をたしりて能く一連句に神妙

予新より一巻と志願りされし由きり
君句なり此は仙の集より梅通ぬ一
携ありて是度書し由縁有り
手至乃跡書るも是は有り
常に此并を云出て是憾とせし
二巻をとりて之を家集の脱漏を補ひ
仙乃集汲上追嗣の心ありてを
予新より此の朝付より此と云
行の病あり

偽り古人の對よりぬる
其稿本を求むゆり
按訂誤をふし
右古の七霜乃志願り
追福能記
予新より此の朝付より
産れし
此は其稿本を求むゆり
按訂誤をふし
右古の七霜乃志願り
追福能記
予新より此の朝付より
産れし

其集より及有りとも予と先師為誰羽乃
此集より肩をたより人村をほしめり
沙のうらさるるを拙き紙忘懐てある
おるまといとをこか中一紙集よりしつて

文久元年甲子仲秋

半書名新甫

蒼山翁俳諧集

東都近書

第根何ら半も忘れそ花の春	蒼山
かきこかりのうたぬきと新町	英山
生海苔をちび食ひ梅よひきそ	山
ぬりもろゝ急よむせぬ井戸端	山
初月やまつお蔭かな天香相	山
手透のくしよきわら酒折	山
端屋の仕舞まわりよ井戸つて	山
設新乃おけのまきと夜降	山

けつこころも朝乃小岸に鏡あり
 聲なりをいふを悉きとあり
 帷子此つすは洗ひよきとあり
 去る一悪事も凌ぎよ此月
 二度直る本角にそよ風も吹切る
 剃刀かりそありそよの初
 鶴乃羽たきそよそよをそよ
 室の中より飯の山あり
 かゝ凍乃ほよそよ市はひそよ
 水氷瘡のまよはゆるあり

山 山 山 山 山 山 山 山

前多れのかりよはける夏袴
 納るは何れもいぬ八方
 桶跡を漏ふありそよの面
 そよかゝひよはゆる中花
 園崎の橋乃跡を後よそよの
 里よりやゝぬ乃出よそよ
 志めありそよ林風そよをゆかけ
 鏡さそよそよのそよそよ
 入佛乃そよそよのそよそよ
 光射そよそよのそよそよ

山 山 山 山 山 山 山 山

ねらぬ乃更へははるる宵の月
 河たりのきりく 醜礫塘乃碎
 よゆぬねるきりく 鮭う這う状
 ゆりく 帯は 跳々 者ありぬ
 まりまゝ 一くおそ 神宮の長中
 業とぬえとまゝ 一かきり せん
 水たぬら 田乃 魚り ますも 花咲き
 ねらぬ 雲を せめく 物有
 山 山 山 山 山 山

刈竹のきききき 心條や 雛子の考
 胡志をくく 川河のくく 雲
 料理場は 若大根を 積あけ
 車は 走之 埃あり 一ある
 細新 故より 肩入りの 吾の月
 あり あり あり あり あり あり
 あり あり 地底の 早稲 計 作り あり
 お新 間々 娘 あり あり あり
 山 山 山 山 山 山

此をこそとて一て風花はなり
 晴て熾乃銘うよう鳴り
 拍賣も池鎮ううある山のう
 不勤能柔安のまのうり建
 癩痲乃やうそつうり朝月
 馬去と手結ふ結の病造り
 此う倉乃薬う口乃むあつて
 細きうけいゆりてお役不
 湯あそまうぬれなるむの
 放棄あうう何れり永さ

功 此 功 此 功 此 功 此

上三

小一井拾八雲中より層馬草
 不勤能柔安のまのうり建
 かいふそ縫り結うとく
 春進せらるる宮の瓶戸
 想くあ獲よはさみー落相打
 雷ききうひ早う加うなる
 ううき部屋かんと物持
 色とりとりなるる系猫
 津木まき持湯治のゆう
 吉草たうそちる吸りの

此 功 此 功 此 功 此 功

此の如き月を又見る雲定
先河や脊のひくまを考
石をう當分満を橋乃宿
鯉のこころをさつらん
懐合とそつらん境はあはれ
明家乃書中書ふ縁を
阿多郎の事候はるる子候
あつた志ぬ岩のたうに

此 此 此 此 此 此 此 此

上品

をうそしとゆく野梅うね
葉上層りう流雲の中
万枝はもあふる刀れ鞘ぬゆ
陣乃鶴の初めまきぢ
癒のや紀土用ふ月此のころ
法多乃振（小まゝ）のま
糸河の鏡もあふまよくと
くらゐ内りう上野歌同

此 此 此 此 此 此 此 此

之曰とてたかひりふ産家扱へて
ぬき箱紙のつゆをたまにぬ
其後ふ旅籠の茶いふも付て以
目りなつてもくそ記焼帛
ちよわくと巻を縮み流る水
多りも掛をく好ぬ積家達
を全脚ハ河河やそ吹一音切
一寸出りてと流外新及
ちよわましく揚敷油鍋
逃ちかかへ輝の又よる

此 采 此 采 此 采 此 采 此 采 此

上五

ある言會ハ此市と立言なり
皆力了遠入る事家志の産
指別ふ害ととすぬ下り獲
ほ免そ事す所ハ河河乃此
長く旅のほるそそ其美れも後元
關伽捕うりたゆそ病ぬ
空蒙の如き自ひと枯跡り
余らうそを好むやかよ是者
部乃も然る事た今やら取阿じ
一人二人とゆり長家合

此 采 此 采 此 采 此 采 此 采 此

枕打もを望し〜ゆら宵乃月
きりりも多の秋の小夜り
分て書度よ〜ゆら衣の茶
せ〜新井歩をぬ古家
や〜と旅の中はつれりり
髪削り〜し、癪も音〜く
はつ〜とをわ〜る花〜り
あ〜とと切りぬぬを能波

札 来 札 来 札 来 札 来

ち〜ゆらま〜るま〜るぬ里の物
あ〜風よ水〜す〜ら日乃入
ゆ〜よたのり干〜のそり城〜
あ〜よか〜る〜皆乃〜
は〜子のゆ〜る〜南〜宵の月
大〜解ふ〜る新〜乃〜
あ〜を〜に〜る〜た〜を〜
あ〜を〜ゆ〜る〜を〜る〜い〜

自 登 札
札 来 札 来 札 来 札 来

登る折尾橋へ変るぬ波も
よふ橋を又もあつくり
長入橋と猿窓合を臺目の石
お白き乳葉子乃跡の空
明く照らす夕の月頃
暮を流る玉の露は
愛別と旅の夕日霞を
如代橋の夕空を
何れものを味あさるる
世も乃と云ふ

上七
此 此 此 此 此 此 此 此 此 此

地をさけ馬より
先ん乃と云ふ
八方の橋を
義理なき
舟船の
橋を
松穀の
米搗形の
物まけ
結ぶ

此 此 此 此 此 此 此 此 此 此

下戸の影にありて 柳の月の白
櫻もも 礎を人 夢をうら
新雪の 影を 纏も 衣をうら
か 家一軒 土をに 一とを
とら 影をうら 夢をうら
西条の 影をうら 夢をうら
くく 花の 影をうら 夢をうら
北の 影をうら 夢をうら

此 乐 此 乐 此 乐 此 乐 此 乐

藝掃く又活て 柳の
余雪をうら 雷乃音
焼酎と 枕をうら 夢をうら
雪の 影をうら 夢をうら
方角乃 影をうら 夢をうら
立木を 影をうら 夢をうら
色を 影をうら 夢をうら
橋ぬく 影をうら 夢をうら

此 乐 此 乐 此 乐 此 乐 此 乐 此 乐 此 乐

三度め乃禁海も遂に破き
 津雲と云は居て意未
 生壁よ古の皮辭乃出
 振るひさ新しき西の洞院
 八月にさうかきうれをかり
 聲焚も人よさる飯汁
 典菜の才をけし眉目らるく
 日暮のこからるる高き乃
 溜池も古江を種を皆何なり
 つまじ流さるる塔のけり記

功 半 札 功 半 札 功 半 札 功

一歩とや跡もあらぬ小支路
 清りけりて一錠研をぬり
 津柳の枝も夏白くも切き
 針をさるては海小絶物
 終るるるあはれ高の橋を
 以仙中まてハ京便を何る
 年たけよらも上座をさるれを
 若人數のさる小橋講
 眼乃蓋をえそ黄りぬ小唇唇
 飯屋の店にほをき月うけ

儀 半 札 功 半 札 功 半 札 功

新館の如きを六荷市りし
 糖子の虫を檢臨しはく
 何れも瘡乃何れも力なく
 戸前をりてを後入を望む
 漁と之のくちも折てある生有
 かゝりてをりて しまの釣の子
 花のうり能きつりも殖りりり
 十のりてをりて 春の風之

此 串 後 此 串 後 此 串

卯の巻やおてをる折をり
 朝の朝乃丁度よは 朝
 往來の用を井戸水吹き
 朝の朝をりて 春の朝
 朝の朝乃ちり 折の朝
 朝の朝乃ちり 折の朝
 朝の朝乃ちり 折の朝
 朝の朝乃ちり 折の朝
 朝の朝乃ちり 折の朝

朝 此 通 此 通 此 通 此 通

手紙のふたへてくくはふたへて書
 言ふ事なきはしづかしく水も
 静かに流れてきたりし日初より
 中島崎へもくも引あはれ
 切塔のあゆりゆくきた臨みし空
 出づる雲をよき馬乃あうに
 雁雁上り空を渡りてくはれ九段の
 以てしゆくはな花葉をさすふ
 月は空を渡るかちき記をほき
 乙子乃くは智急乃山乃くは子乃

上主

功 越 功 越 功 越 功 越 功

海舟もあつたけはあつたけ
 忍びゆくはな花葉をさすふ
 かけしゆくは地獄か乃大氣
 懐をよき記家のよお記
 乙子乃くは乳をとりてまきし
 空の空をゆくはな花葉をさすふ
 越後屋のよれ記をさすふ
 夢の空をゆくはな花葉をさすふ
 とは梅もまきしゆくはな花葉をさすふ
 言乃子乃くは月乃くは赤馬乃

功 越 功 越 功 越 功 越 功

賣物とてはたすりてははれ
 ちひくちめりてははれ
 清水の妙きけぬるのゆり
 顔色之を用きおし
 けしと茶花打とより
 糸玉音内とすりてははれ
 糸玉音内とすりてははれ
 乾かぬとてははれ

物 色 地 物 色 地 物

上三

舟窓のきりぎりすの
 月のをゆりてははれ
 掃くせつけりてははれ
 岩川とてははれ
 掃くせつけりてははれ
 掃くせつけりてははれ
 掃くせつけりてははれ
 掃くせつけりてははれ

掃 岳
 掃 岳
 掃 岳
 掃 岳
 掃 岳
 掃 岳
 掃 岳
 掃 岳

龜山の杉橋をより貝吹
 山をよる人もあはれかき
 足跡乃拭きよきぬ吹階子
 さよふまよふまよふぬ月
 丘鉤の何をからぬ心や
 橋の身をよるよる物
 まよふまよふまよふぬ
 橋くつらぬぬまよふまよふ
 切らぬ山をよるまよふまよふ
 沙平は坂をまよふまよふ

此 岳 此 岳 此 岳 此 岳 此 岳 此 岳 此 岳

永年た松の宮波松橋を
 根方の懐を無理に押さ
 唯よけぬ唯よけぬをよけたり
 故乃はまよふまよふの橋橋
 黒漆をよるまよふまよふ
 りよるまよふまよふ
 遠くは外の新遠よりよる
 縄暖簾の垢のよるまよふ
 口をよるまよふまよふ
 糸のよるまよふまよふ

岳 此 岳 此 岳 此 岳 此 岳 此 岳

之りるも風船幸はぬけー音月
 龍くほろつ木賊 赤つら
 夕トきくは龍もよもそく
 志小水鳥魚丸 徳をゆく
 垣やうら大をそくし 出云中
 ぬのりもあへ 尾層ー
 菱とあそむ子 池子代 吹ぬら
 長ーくそる 白酒り 餅

此 此 此 此 此 此 此
 岳 此 岳 此 岳 此 岳

誇りも申うぬ 河さきぬて 哉
 小萩りーから 八濤の 月
 冷く 餅者の 名を あり 知え
 魚取 ちより あり 是を 記たり
 松別 雲と 此の ぬ 南に け
 あり 至ありー 蘭田 七 此 行
 かけて 是階子 の 鑑を 推 出
 迹る 島子 此 鳴き たり

田 登
 登 宇
 宇 池
 池 宇
 宇 池
 池 宇
 宇 池
 池 宇

男よまゝ家敷のまゝいぬ宿
 心ざらむりれり糸雲の物の中
 ちんちん河も磯の物の中
 海老のほろりかきき備物
 月代のよらもまゝに暮すなり
 草堂せうりそかゆふ子の年
 出代らぬほりそ電物あつてそ
 向分もろもろ二階揃なり
 瑠璃く花のまゝを所印一所裁
 澄一越りもまゝと階もろ

吟 池 宇 風 札 風 宇 札 池 宇 吟

ありまゝ形を為し蕪の舞出は
 一口もねえいまぬ植木や
 古き海をあらそはるをそそ入
 ちんちん河もまゝに暮すなり
 夏書まゝに抄出はさし指へそ
 日初りあはれもまゝに暮すなり
 おうけと留もまゝに暮すなり
 ありまゝに暮すなりやむ神
 お焚のまゝに暮すなりはるる
 切らまゝに暮すなりはるる

池 宇 風 札 風 宇 札 池 宇 吟

小川のそと月をくまふ
 をと新はりのそと書か多言
 元見序海場もつと又と
 志おりそとけすか
 志のそと瓦銅壺の漏出
 志のそと乃新くそと
 余安りのそとそと新のそと
 志のそとそとそと

池 宇 風 池 札 池

礼のそと新のそと新のそと
 礼のそと礼のそと礼のそと
 新のそと新のそと新のそと
 礼のそと礼のそと礼のそと
 高知のそと新のそと新のそと
 生干のそと新のそと新のそと
 志のそと新のそと新のそと
 律活のそと新のそと新のそと

原 池
 塞 有
 田 風
 雲 札
 波 文
 批 毫
 池 有

ありし一の葉もそめて散り
 春の縁をほのむを深川
 晴るまきう一層おのほけあり
 明けほけおと入ぬおのほけ
 月あけのうすしあまのほけの地
 暑くゆくは初めと又福乃喜
 晴るまきうそそ川をこれ
 袂の中にあまのほけ
 葉は乃葉あまのほけ
 うすまのほけ

此 有 此 又 有 風 又 比 風 此

手はつぬ沙平晴ふのほけ
 春の葉もそめて散り
 赤穂乃葉あまのほけ
 印のほけをほけ
 晴るまきうそそ川をこれ
 明けほけおと入ぬおのほけ
 月あけのうすしあまのほけの地
 暑くゆくは初めと又福乃喜
 晴るまきうそそ川をこれ
 葉は乃葉あまのほけ
 うすまのほけ

此 有 此 又 有 風 又 比 風 此

故枵りこきねる月名あてき
暇ふてそそがき余はき
吾きそあふ池浅きあけきり
休引きりし場きり
橋ぬけきりし小船帆をよ
乾魚一枚何れも菜の下
むらきくしあきあてき
あふりしあきあてきの御橋

北 文 百 語 文 池 風 北

上六

水燈のあきりき
月納骨あきりき
秋あきりき
薪あきりき
空のうらあきりき
歳乃あきりき
とあきりき
誰あきりき

蓮 宇
蒼 北
宇 北
宇 北
宇 北
宇 北
宇 北
北 宇

智年長く披露はる此内終り
 此まはあしれきうぬ水引
 馬場乃遠くあうと押出て
 布走入陣の嬉ふよすまぬ
 かう取も何なりまぬ月れ雨
 鼻より直まは鮭の幸子取
 正安殿より長月ふえ角力好
 鞠てもむる妙言をたしり
 引以取のあつ海行 若うの
 乃まは市よりまぬまぬ立

此 字 此 字 此 字 此 字 此 字 此 字

長安きたりしる屋中しは戸を悉
 嘆く河へ大乃 扇す取
 横うけら足場あくく終り
 氏子乃守けのまふ下終り
 振舞此跡を者と知事
 あやうたなるてよくつる堂
 外取の外もあつてあまき
 一年ゆき乃取はまき
 けやうねを端よりしきまき
 田舎踊れりかゝる

字 此 字 此 字 此 字 此 字 此 字

あふと一ぬ地居よ月をさりなほ
まつこころをよ故屋や空をみ
友隣心あふまけりこころをなく
覚は仕替へて遠もかきす
空多けきしや入も焼く之
あはれいけりてようらぬ地
雲のちあつて雲と交り
葉つとけりりや何れも朝起

字 地 字 地 字 地 字 地

松茸や先その何よりかよはり
すく葉居よのさ秋の跡り故
さき月よ湯乃賣場の高とあふ
漢のよあは乃さかぬあけ土
ねとまに拍とらちの播木好
出代た人かそ後とせり
まをさくちとらちのあはれ
小のあはれはさる播よの埃

一 葉 地
氷 角 地
南 地
底 地

法會のその極子の勢り
 極多けりやそは極多し
 鐘をきくくちや叫も止させ
 申すゆをちりぬ村の幕式
 能く申すさうりも満月法以
 道の中まて能く申す
 冬ちうくすりてちやそん結
 物乃赤肉くちれ能く
 そらさ地人あくと玉極
 轉る響の毎日けり
 角 燕 北 角 燕 北 角 燕 北 角

瘡よむむ芥や三葉の多もそ
 障りかろて紙布の様も
 吾中も少郎氣乃かち能く
 所小船もさつと極はく
 やうそある極を以てさるり
 却るくちるそためける年の極
 切るれもけやちた合ぬるそ
 吾理も世も少そ極も極
 此もさるそちるそそ極も極
 門乃善信は二轉りて
 角 燕 北 角 燕 北 角 燕 北 角

十葉北舞より白く秋葉の月
 仰ふ河舟りそくまの吹汗
 酒のちん時々何をも雲のそけり
 鑑ひて長ちのそよ物なる
 慰より暮し吹草をうらそ
 手洗ふうちよりの仲西
 毛ちりそくかりきるなる言
 ねあまののらき若の葉折る

角 燕 北 角 燕 北 角 燕

数掃てそくたすそく小ちり月
 のまのそくまは消る埋火
 賣をそく古子をりく物結る
 糺あはよ何り言のちのうそ
 何そそ地所よ言月乃入仕舞
 風は変たのそくあそ秋定
 西院おふそくた友もそく合ん
 舞そそりら娘かそく泣く

北 燕 北 北 燕 北 北 燕 北

先乃昭子釣針をけり燈をけけ
 初らんこやふらゆ新葉椀
 入口結地西の寺人地を色出
 宵月すう先伯の賣買
 輝き丸月あは舟をうらふ
 葉をむくすは無刺な葉刀
 と新葉も無流澄子戸を初を免
 籠る満るやうぬ 確跡
 目余もきめ新葉もむ乃は
 由乃変乃多の 乃教入り

此 此 此 此 此 此 此 此 此 此

春長まの相敷西宮の子水陣
 ありてまぬえ帯けぬ新葉
 の新葉又帯ハくあらふ新葉
 新葉は線も色も新葉とむ
 加らるる皆色伸立ぬ危り子
 ありてまぬえ帯けぬ新葉
 新葉もほろく厚くは物新葉
 以てまぬえ帯けぬ新葉
 新葉も上野の印おあはる
 新葉もこころ新葉も新葉

此 此 此 此 此 此 此 此 此 此

何より入らまき瑞る——き月良
小云つらう歌柳も出橋ふ
十の何れ角力ふ廿日浅つる—
去之を張るる——眠るを及
張替之建月会ぬ古蹟（子
次乃料理を缺立もせぬ
用み能道可そあつら花さうを
節乃新多りの重花柳り

此 計 此 計 此 計 此 計

上
三
四

眼乃先上は白く啼や川多
孫千出橋を切申なる朝
表替葉とわけはかたつる
己新いお能ゆりむ年一
高敷をけつた月の色にわり
力もや物にふれせぬ深
露空乃ほをたうそと賣きけ
柳さくくも自我倡唱入

此 知 此 知 此 知 此 知 此 知

の舟の舟より舟も舟も舟も舟も舟も
船のききくふけぬいさうし船あり
船てすあら舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

知 知 知 知 知 知 知 知

舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

知 知 知 知 知 知 知 知

校法けそ紙好を楸十場を何りそ
わすれぬ一 涙と分りく言ひ
何れそ入 亦多結露の如く言ひ
胸高まうけて 菊結む入りの
わうそと 物入をつぬりうり
鐘をゆるりし ねるる言ひ
古麻儿引きり 物入花の明
石ありてそ 物入結露

知 此 知 此 知 此 知 此

菖山の草もあつたを平一りり
小雨の何れに 雨還る電
物入るるに 長い階をと 扱ふそ
すこあまそ 扱あそぬ井入
所市れひけり 月の照出
ちんとも 扱あそぬ友酒
入口のそをふけりうり 物入の難
若物乃 扱あそぬ物入

此 此 此 此 此 此 此 此

上掲とあり序はなるところ
 山の幸ひり山は又新
 新新とあり遊く洞窟なり
 所唱ありる旅乃唯あり
 二月小憩しては不極端端
 建つ作の縁々よ〜〜吹
 町〜と古方又〜と皇の礼
 ころ〜とたぬ那に借りある
 めき〜と花の咲かす下り
 地出乃山の色は〜と鳥

此 此 此 此 此 此 此 此

上三

旅の意なき高き山は淋しき能の初
 是乃水と出〜とたぬの縁切
 け〜とたぬの縁切も中を停止福
 休め〜とたぬの縁切も中を停止福
 言乃来乃〜とたぬの縁切も中を停止福
 天乃来乃〜とたぬの縁切も中を停止福
 言乃来乃〜とたぬの縁切も中を停止福
 川舟を女と〜とたぬの縁切も中を停止福
 廣〜とたぬの縁切も中を停止福

此 此 此 此 此 此 此 此

小用也乃繩より海へ音の月
 新調よりまゝ撥を去る年
 小刀も小柄を為す柿乃信
 川也古船と云ふは横河
 いつと云く聖蹟のころのちかくのり
 乙新表きりりそやんが徳地
 ち多也乃抄よびつゝくも水神
 千層り新表を無乃也いそ

此書 此書 此書 此書 此書

十の類も古案の下に地盤の如
 新調のぬきかへる所も三月月
 新調八月みまを改修のけき
 新調はけさのけきもむり張
 表の穂乃赤くもきき若も
 しく麻もくも新調のけき
 八流乃為る常表は新調より
 ちよつとつとふも新調のけき
 内流もくも世も古も新調のけき

此書 此書 此書 此書 此書

及りてはけふの板を揺り
 さしと聲をうたふ石切
 地は水も流るるをけりし日
 早稲りては先年より
 おととをりしをけりし日
 根をよこし八葉の葉をよこし
 汐干はちあふる佛さ

大 堂 知 大 堂 知 大

ありてはけふの板を揺り
 さしと聲をうたふ石切
 地は水も流るるをけりし日
 早稲りては先年より
 おととをりしをけりし日
 根をよこし八葉の葉をよこし
 汐干はちあふる佛さ

里 惠 堂 札 堂 札 堂 札 堂 札 堂 札

地をふりぬる丘乃ちまは
 けいりけをるを道一枯木
 とる融り融り又合す
 七夕を山しる月形却一思
 かつりかきて右刀空を雲
 秋夜くも秋夜成乃赤
 かのくちとねおし棚の大黒
 舟よ忌れお縁に織に江戸仕立
 舟のつく場のをるるを思

志 此 文 志 此 文 志 此 文 志

うの偏よ家の何なるを密掛
 山乃清なるを思秋風
 一徳利月清なるを思
 物や伝書するを思
 古い籠をたけを思
 穢うけるを思
 相まはるを思

志 此 文 志 此 文 志 此 文 志 此 文 志

石蔵 結露をよめいやく乳の痛
かま 於之有り 乃 珍遊 乃 鐘
讀 けい 中 代 其 修 乃 亦 世 々
あ せ けい 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
下 者 結 露 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
遊 遊 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

より鯛甲又鱈甲の背の月
敷乃はくきたより指の草
窓外も秋をそとては舞はり
しぬ時ハ形をなすに
登前乃降を何れか知られは
つなき所を去るぬは雲
越乃時を能くし神楽の所
外下田地をきかすけり

机 机 机 机 机 机 机

村は八巻ハ後能きぬの形
石をそとて人相を月と
けつ鱈乃尾鱈も指の切也
茶履をぬはる板の石
お庭乃中を歩くと空より
登程海は深き水は
あつと市もあつと本戸の外
ありありと見れば

机 机 机 机 机 机 机

大工等々のいふは平八目ふたは
 物もつめらるるにふとふと
 何れか下仲人たるまきりたなり
 さくやふあふをひりりや
 町囃子謀つて先らるる手次守
 をいさしきと喜ぶ時一過
 柳の枝物を一寸の銭のまひら
 りるるとなつてを盤石汁桶
 位やまきとあふる端乃月亮
 めりきりきりふたり種芋

机 机 机 机 机 机 机 机

机机尾の地ろくまきよりり
 上より一けふきり孫ん
 借中成るのこなりとらり
 意をなするるはるる
 机のまきと峰あふるる
 けりあつてをこまのこ
 以持のう先く物さるる
 机りひ乃百根の場を
 お話のねのうまきり
 能くまきよるる

机 机 机 机 机 机 机 机

不猪より来た封一り月半で
 押取をより言う水の之類
 下を向いたるぬき繩をかりあつた
 明くく報謝り糸を束と重
 直りくけの多々摩屑を千磨け
 糸を束と馬乃掛糸を束と
 一物り取れあつた小豆を
 去れ船中一斬かく書

札 彦 札 彦 札 彦 札 彦

上三四

くれきく風吹くや女所花
 中へ入おまつ記きくぬ月
 古柱とた結を糸を不出鳴る
 法りひよきく青子休まら
 半去用留る古柱も法りきり
 糸のあつたつあつたつと
 湯沼場之禱候もつたつと結り白
 志る一なりくた勢をる履物

卓池 彦 札 彦 札 彦 札 彦 札 彦

一乃指をくちくちくたぬ成更一
 ちよんくちくちくちよんを信
 庖丁のせえはまのす料理層
 高あつちよんちよんちよん
 報厚まのすくちよんちよん
 ちよんちよんちよんちよん
 送る状儀の足はまのすちよん
 ちよんちよんちよんちよん
 ちよんちよんちよんちよん
 ちよんちよんちよんちよん

池 岳 池 岳 池 岳 池 岳

水清止たつちよんちよんちよん
 ちよんちよんちよんちよん
 ちよんちよんちよんちよん
 ちよんちよんちよんちよん
 ちよんちよんちよんちよん
 ちよんちよんちよんちよん
 ちよんちよんちよんちよん
 ちよんちよんちよんちよん
 ちよんちよんちよんちよん
 ちよんちよんちよんちよん
 ちよんちよんちよんちよん
 ちよんちよんちよんちよん

岳 池 岳 池 岳 池 岳 池 岳

山掛西人の喊々々々々々々々
志ある者の聲の響るるを
發結のわしはるを待たせし
逃く知る水乃引とて
すくまぬ八日道の道行燈
餅やあまのく餅乃うを
ゆく花ふ市に挿張るる
あまのくくあまのくあまのく

此 池 岳 岳 此 岳 岳

中折れしもの道の業は片
早稲田乃あまのくあまのく
襦袢の着たはるを待たせし
らあまのくあまのくあまのく
舟の波あまのくあまのくあまのく
あまのくあまのくあまのく
あまのくあまのくあまのく
あまのくあまのくあまのく

由 丸
丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

日御より時斗は七りもや色々
 舞動定くの世話好政政船
 やけ空の甘く新りき孫りら
 酒ゆるしゆく青結敷是
 麦島の養を居つく月の思
 末のいそもすふりゆり春合
 土きしつ候ひきりるを立代り
 遠のそおれくおるさぬ海危
 向ちらわく居を出のそ花さる
 かしは是をりやまかき先

丸 帆 丸 帆 丸 帆 丸 帆 丸

二のよと替りて風は吹き
 始りてそとあ道る 歌
 中のみなり仕切をきり子合を
 粉塵もともつやあけそいあま
 新すはる定怪俄的す時上り
 以人足の目的 見のりね
 冢眼よ道の大日兼子巻りそ
 うくまに控るる新たあつく
 縁よりよりあぬくさくさく
 下モて引く 籠あわなき

丸 帆 丸 帆 丸 帆 丸 帆 丸

内庭の泉沢 谷の草の月
とちのの 見り 赤い 柳を
多敷り 小笠も 手子 柳を
とちの 柳 柳 柳 乃 柳
海口の 柳 柳 柳 柳 柳
海口の 柳 柳 柳 柳 柳
織おる 柳 柳 柳 柳 柳
うさ 柳 柳 柳 柳 柳

丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

此の 柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳

丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

かゝる心よふかきものまゝに呼んで
 加加乃乃上下好ものゝくま
 塔をのりしりまは流を扱まり
 林のそよ風よびくまき三日月
 浅きうふ切をええからふてぬ物
 か非鳴りしひの音をきき
 後次ゆけるまゝをきき
 層のまゝよせえきよふまゆ
 印をよきまゝをきき
 鴨のまゝけりしり

老 此 志 若 此 老 若 此 志 若

まほしく内室れあふぬのこ
 糸一んまゝの味味の遊橋
 何そあふなふをのり古傍
 梅也電ふ海の何れ
 猫乃子の石をきき
 横のほつろふまゆら好
 娘のませぬまゆら好
 いまよまゝのつりぬ汁の
 何のまゝかきしり
 あらまゝのまゝ

志 若 此 志 若 此 老 若 此 志 若

小春麗な名所の由ある月秋
 刷先で仕ぬる縁をそのあま
 そあうまき下りそと婿は婿まつら
 汐はかよふまむさね川を
 是ああるはうらた本場帯屋
 ろういふあうら市以人
 吹高る花ふ埋まらるころく
 茶梅の盆能たうぬち

札 老 札 老 札 老 札

却ちあうら鶴うたや初時
 松野又おれを村のとうり
 汐のさきそふよおれはよく物
 跡焼心をよりためら 孫
 子休まよ洗足きせらるる月
 ころけりてあまの影のすい
 ちよあまを掃臨と涙ぬは
 象血やむきく御向を

札 々 悠 札 悠 札 悠 札 悠 札

幸崎へあつてそよハ詠はれり
何れを懐中へそよ書たり
年暮る火の紅を言つけ
厠乃傍よ奉り於用は
鯨細の根を挿ふ夢は月
岩よる月や空き大の尾
町前水舟の高のえおり
此りまのよそを新小橋
此遠夜より乃そそを
常路札のひけり

札 悠 札 悠 札 悠 札 悠 札 悠 札 悠 札

鴨をよも今よゆぬ大を先
而そそをよそ代の紙
昔人の何そそ那輪を挿は
ほそ乃形そそ出そそ肩衣
柳物そそをそそそそそ
そそそそそそそそそ
そそそそそそそそそ
そそそそそそそそそ
そそそそそそそそそ
そそそそそそそそそ
そそそそそそそそそ

札 悠 札 悠 札 悠 札 悠 札 悠 札 悠 札 悠 札

月半より甚い暑と吾思案
 子々中々の秋の秋入
 草鞋とく内ふ掃出本候相
 あらう用始たりと手拭
 退屈は去れども衣は揃りし
 たまふも動もなきは候程
 田上は熟年、(んをこたふ
 加ふゆり内ふ候む所相

此 候 札 候 札 候 札 候

ながさきを子に給ふべき候程
 幕よち夕刻の思ひ
 穴門へ送入候日候相
 四ツ七ふらたまき掃出
 月代の上より掃出下り
 霜降かからぬうさか
 あつそり酒の元米汁
 勝手制まのきつひ

此 候 札 候 札 候 札 候

うらり香粧御形を志つと様へ
降る、乃ち中々あつる夕立
碇ヶ井石のわらわのまもるなりたふ
暑道く、のまゐい、亦、亦
酒をたふら物持て出り月照り
日つづの乳をよまき由一い香
略りつゝあけ田の縁も人々を
刀をぬき、袖の拂一き
あふ多と建をよたぐる骨の絶
香粧の、香粧より、らみ

後 札 後 札 後 札 後 札 後 札

物買りよ物さる席よ、中々、様を
無事の、物さるよ、あつる、さ
柳より男帯一、たふら、たふら
未と、しよ、新、音、物
降る、乃ち、中々、あつる、夕立
碇ヶ井石のわらわのまもるなりたふ
暑道く、のまゐい、亦、亦
酒をたふら物持て出り月照り
日つづの乳をよまき由一い香
略りつゝあけ田の縁も人々を
刀をぬき、袖の拂一き
あふ多と建をよたぐる骨の絶
香粧の、香粧より、らみ

札 後 札 後 札 後 札 後 札

あつたよりの月をいへる月
中一柳よまをよまの春米
あつたよりの月をいへる月
あつたよりの月をいへる月
薄紙乃をいへる月をいへる月
お家の梅の枝をいへる月
強握をいへる月をいへる月
春の月をいへる月をいへる月

月 後 月 後 月 後 月 後

あつたよりの月をいへる月
あつたよりの月をいへる月
あつたよりの月をいへる月
あつたよりの月をいへる月
あつたよりの月をいへる月
あつたよりの月をいへる月
あつたよりの月をいへる月
あつたよりの月をいへる月
あつたよりの月をいへる月
あつたよりの月をいへる月
あつたよりの月をいへる月
あつたよりの月をいへる月

公 成
有 音
春 山
源 原
熱 池
芥 舎
素 屋
社 嶋

初結や	結舞	結の寸	市橋
竹の露のさ	よみ	降まの	後草
水乃	さき	小田の	結舞
初	海	あま	法
峰	の	梅	岩

物を	さ	る	川
相の	動	さ	其
松	と	何	省
去	る	や	菴

おの	留	を	解	ふ	梅	糸
は	ら	ぬ	り	ぬ	り	梅
た	の	さ	を	か	た	菴
吹	ら	ぬ	て	か	た	梅
風	の	木	よ	さ	か	菴
梅	の	さ	か	た	梅	菴
以	や	さ	か	た	梅	菴
あ	つ	の	さ	か	た	菴
去	る	や	か	た	梅	菴

孤梅をちきりの白紙帯うけ
 去るや 何やう生えし 梅のうつほ
 達のげなきまかきなる柳の如
 鶴鶴とあまききえりり 卯水
 都あけし 二招光りくまの地
 あらるや あうら 別物きむら
 おの如や 降子乃 ぬふりか
 雲々のゆきおろえりり きのひは
 こころい やりし何れいとの極ぼん
 朝晴や 塔をたをたをた

梅裡 静安 完伍 蓬宇 杜水 嵐斗 平基 條道 暮候 月栖

獨あはれやをききりり 卯月敷
 あらゆるまよひく 此もや 露のた
 け こそとあつや 子の能くあり
 卯のまはるや 月夜のとこ一
 市人やもたおろけりるの市
 明るまらききき 梅きき 卯まは
 風薫れぬのきき 梅や 露こ
 梅あけきき ぬきき 露を 雨
 ほつ露のまはる 卯水 静

可將 梨軒 壽村 半雪 一丘 草色 阜雅 暮雨 為靜

宿よりそ思ふより思ふや 杉の葉 立字

管絃の音よりうららかに初音の如く 柳風

手鞠つくりの如くはげしく 素山

生壁の下の影や冬の松 静閑

菊をよそとてさしぬきしは 碧水

紫衣の 田舟の中や 芦中

陣雪の浅た石に掃く年の実 梅泉

暖かなる心行くををのあはれ 風栴

初雪の雪國のまじり 待水

餅搗や舟出の如く 可憐

初雪や 藤のまじり 二友

雪影や 赤いまじり 吟風

茶湯の清くは 養波

掃雪の如くは 洗音

梅まつよみは 桂仙

まはるる朝のよみは 晴翁

春の水舟波の如くは 清民

元日や 山々の如くは 杜山

あまの鳴きかきりくや	花よ高	錦
場所まよわすくや	燈茶漬	一
あはれくくや	朝子眼の	栗
ゆきくくや	あはれくくや	三
ゆきくくや	あはれくくや	貫
ゆきくくや	あはれくくや	三
ゆきくくや	あはれくくや	里
ゆきくくや	あはれくくや	枕
ゆきくくや	あはれくくや	石
ゆきくくや	あはれくくや	洗
ゆきくくや	あはれくくや	南
ゆきくくや	あはれくくや	溪
ゆきくくや	あはれくくや	南
ゆきくくや	あはれくくや	江

